

『忘れたふりをしていただけ』～一夜を共にした御曹司と五年ぶりに再会しました～

第一章 再会

雨上がりの匂いがする東京の夕暮れはどこか湿度を含んだ重たい空気がビルの谷間に漂っていて、私はその匂いを吸い込むたびに五年前のあの夜を思い出していた。忘れようとして忘れられなかった記憶は、時間が経つほどに鮮明さを増していくという矛盾を孕んでいて、それはまるで傷口が瘡蓋になるどころかむしろ開いたままの状態でじくじくと疼き続けているかのようだった。

私は二十三歳になっていた。あの夜、十八歳だった私は何も知らない無垢な少女で、目の前の男性がどれほどの地位と財産を持つ人間なのかも知らずに、ただ彼の纏う空気に酔いしれていた。

それから五年が経ち、私は大学を卒業して広告代理店に勤めるようになり、日常に追われる中で彼のことを忘れたふりをしていた。いや、正確に言えば忘れたふりをしていただけではなく、忘れなければならなかったのだ。彼の名前を検索することも、彼の写真を見ることも自分に禁じていた。それは、あの一夜が現実だったという事実を認めてしまえば、私はきっと壊れてしまうと知っていたからだ。

その日、私は取引先の大手不動産会社との打ち合わせのために、丸の内の高層ビルの最上階にある役員会議室を訪れていた。エレベーターを降りた瞬間、フロア全体に漂う高級な木材と革の匂いが私の記憶の奥底に眠っていた何かを刺激した。受付で名前を告げると、案内されたのは予想よりも広い会議室で既に数名のスーツ姿の男性が着席していた。私は深くお辞儀をして、指定された席に着こうとしたその瞬間部屋の奥、大きな窓を背にして立っていた人影がゆっくりと振り返った。

逆光で最初は顔が見えなかったけれど、そのシルエットだけで心臓が跳ねた。五年という歳月は、彼の輪郭をより鋭くより成熟させていたけれど、あの夜私の身体に刻まれた記憶は瞬時にして蘇った。

御曹司——藤堂玲於奈。二十八歳になった彼は、以前よりも精悍な顔つきでその瞳には冷たい光が宿っていた。彼は私を見て、ほんの一瞬だけ眉を動かしたけれどすぐに何事もなかったかのように視線を資料へと落とした。そのあまりにも自然な仕草に、私は自分が滑稽に思えてならなかった。彼は覚えていないのだ。いや、覚えていたとしても忘れたふりをしているのは彼の方だった。

打ち合わせは淡々と進んだ。私の会社が提案するキャンペーン企画に対して、藤堂は的確な質問と鋭い指摘を繰り返し、その声は低く響いた。私は必死に業務用の笑顔を保ちながら、内心ではあの夜

の記憶が津波のように押し寄せてくるのを必死で抑えていた。

五年前、私は大学のサークルの先輩に連れられて参加したパーティーで彼と出会った。当時二十四歳だった彼は、既に藤堂グループの若き取締役として注目を集める存在で、周囲からは「将来の会長」と囁かれていた。私のような平凡な女子大生が相手にされるはずもないと思っていたのに、彼はパーティーが終わった後、私をホテルのバーに誘いそしてそのまま、彼が常宿にしているというスイートルームへと連れて行った。

あの夜のことは、今でも鮮明に覚えている。彼の指が私の髪を梳くように撫でた感触、耳元で囁かれた低い声そして、初めてだと言った私に対して見せた一瞬の驚きと、それからゆっくりと私を組み敷いたときのあの支配的な眼差し。私は彼に全てを委ねた。痛みよりも先に、彼の体温と匂いと、そして「愛している」という言葉が私の全てを満たした。けれど朝が来ると、彼はもういなかった。ベッドサイドには彼の筆跡で「ありがとう」とだけ書かれたメモが残されていて、私はそれを持って誰にも知られずにホテルを後にした。その後、彼から連絡が来ることはなく私もまた、自分から連絡を取る勇気など持てなかった。身分違いの一夜限りの関係。それが現実だった。

打ち合わせが終わり私はそそくさと会議室を出ようとした。上司や同僚たちは先にエレベーターへと向かっていたが、私は忘れ物を

したふりをして机の上を探るふりをしていた。

心臓がうるさいほどに鳴っている。彼と同じ空間にいたことが、こんなにも苦しいなんて知らなかった。しかし、私が廊下に出たところで背後から声をかけられた。

「高瀬さん」

と、低く落ち着いた声で。私は振り返るのが怖かったけれど、逃げるわけにもいかずゆっくりと振り返った。藤堂はネクタイを少し緩め、片手をポケットに入れたまま私の数歩後ろに立っていた。その姿は、五年前と何も変わらないのに、全てが変わってしまったように見えた。

「お久しぶりです」

と私はやっとの思いで言った。声が震えていないか心配だったがけれど、おそらく大丈夫だっただろう。彼は私の顔をじっと見つめ、それから少しだけ口元を緩めた。

「五年ぶりだね」

と彼は言った。その言葉に、私の胸の奥で何かが崩れる音がした。

彼は覚えていたのだ。忘れたふりをしていたのは、私の方だったのかもしれない。いや私たちはお互いに忘れたふりをしていただけだったのだ。彼は私の傍まで歩み寄ると、周囲に人がいないことを確認するように軽く視線を巡らせ、それから私の耳元で、あの夜と同じ低い声で囁いた。

「今夜、時間ある？」

その瞬間私の身体の芯が熱く疼いた。五年間、必死に蓋をしてきた感情が、一気に溢れ出そうになった。私は何も答えられずにいると、彼は私の手首をそっと掴みエレベーターとは反対方向の非常階段へと私を導いた。その手のひらの温度は、五年前と寸分変わらず同じで私は抵抗する術を持たなかった。

非常階段の踊り場で彼は私を壁に押し付けるようにしてキスをした。それは、五年前の優しいキスとは全く違っていた。貪欲で、支配的で私の唇をこじ開けて舌を差し込むと、まるで私の全てを味わい尽くすかのように激しく動かした。私は息ができないほどに彼のキスに溺れ、手に持っていた資料を床に落としてしまった。彼の手が私のスカートの上から太ももを撫で、そのまま内側へと滑り込んでくる。私は反射的に彼の胸を押し返そうとしたけれど、力が入らなかった。彼の指が下着の上をなぞるように触れた瞬間、私は思